
メタリックフェザーズ

クリアランス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタリックフェザーズ

【Zコード】

Z6829A

【作者名】

クリアランス

【あらすじ】

正義つて何だらう。悪つて何だらう。正義と悪の間にある物を見ることができたとき、答えが見つかるのかもしれない。

彼は夢を見ていた。子供の頃の夢だった。彼は、親しい友人と遊んでいた。彼は、この友人とはずっと親友だと思っていた。この友情は不变だと。だがその友人であるはずの人物は、いきなり剣を抜き、彼に斬りつけてきた。

「え、ど、どうして！？」

「御前は悪だ！」

悲しいとか、悔しいとか言う感情は覚えなかつた。ただ、彼がどうして自分のことを悪だなんて言つのかが分からなかつた。

「どうしてなんだよ！？訳わからんねえよ！ -

当時の街としてはかなり大きな街の一つである、シンクス。そこから東へ歩いて、3日ほどのところに、草原がある。見通しもよく、盗賊などもあまりでないので、日が落ちるまでにシンクスにたどり着けなかつた旅人達の絶好の野宿の場になつてゐる。そこで、一人の旅人らしき男が、あまりすがすがしくない朝を迎えていた。

「・・・・・、今日もあの夢を見てしまつたか。」

男はそう言い、頭を強く振つてその悪夢を振り払おうとした。しかし、まるで影のようにどうしても振り切ることができなかつた。仕方なく、彼は出発の準備を整えた。

「さて、行くか。」

男は独り言を言つて出発しようとした時、思い出したよつて、空を見上げて呟いた。

「正義と悪、世の中が、この二つにまつきつと分かれていれば、俺はどんなに楽だつただろうか。」

そして男は上りつつある朝日に背を向け、シンクスへ向けて歩き始めた。

同じ頃、そこから徒歩で10日ほどの国々の首都の城で、一人の男が物思いに耽っていた。

「俺は……正しかつたのだろうか。」

この男こそが、彼の親友で「あつた」人物である。彼らの関係については、後に語るとしよう。

「…………いや、正しかつたんだ。そうに決まっている！」
そう思わないと、自分が保てないから、やりきれなくなるから、彼はこう思い込むことによって自分を納得させているのだ。

「将軍、会議の時間です。」

部下の声が、彼の思想の時間に終わりを告げる。

「分かった。今行く。」

そう言い、彼は考え事を中断して、重い腰を上げ、会議室へ向かおうとしたが、ふと、立ち止つて窓から明るんできた空を見上げた。

「あいつも、今頃この空の下の何処かにいるんだろうか。」

これから始まる伝説を、そしてその中心的立場になることを、彼らはまだ知らない。

時は旧ムルグ歴356年。やがて、Silver Cityと呼ばれる長き動乱の、まだ序章に過ぎない時期である。

○序文(後書き)

今回の作品が初めての投稿なので、いろいろと未熟な部分もあるかもしれませんのがご容赦下さい。二年ほど前から小説を書き始めて、もつと大勢に人に読んでもらいたい、という想いのもとで投稿してみました。これからも執筆を続けていきたいと思いますので、宜しくお願いします。

彼女は、夢を見ていた。いつの頃、だつたのかは覚えていないが、確かに自分のことの夢だ。彼女は、剣の扱いに優れていた。しかし、周りはそれを認めてくれなかつた。

「貴女は女性なんだから剣なんて使えなくともいいんだ。」

悔しかつた。どうして女性は剣を使つては行けないのだろうか。実力を見せつければ、周囲も理解してくれると思い、街を襲つた盗賊達を自警団に混じつて10人ほど討ち取つてみた。すると、周囲は彼女を、気味悪がり始めた。同じようなことをしたのに、自警団の方は、尊敬されていた。

やがて、彼女は独りになつていった。そして、彼女は街を出た。旅をしながら、強さを求めた。しかし、何処に行つても最初は女性だから、という理由で甘く見られた。そして、手合わせをしてみて勝つと、気味悪がられた。

「御前は、化け物か！？」

「近寄らない方がいいぞ。」

どうして！？何故私はそんな目に遭わなくちゃ行けないの…？もう、いや！

「・・・・・・・、夢か。」

彼女は、野宿をしていた。本来なら、女性が一人で野宿をするなど、本来はするべきではない。しかし、彼女は盗賊などが来ても、無傷で撃退することができるし、街の宿屋なんかに行くとまた気味悪がられる可能性があるからだ。

「嫌な夢を見たわね。」

そう言いながら彼女は周りの景色を見渡した。彼女の耳が剣と剣とがぶつかり合う音を聞きとめたのは、その直後だった。

男は、追われていた。それも、十数名の騎士達にだ。普通なら、襲われた地点で十数名対一人ではあつという間に骸と化してしまう所だが、しかしこの男はかなりの実力を持つていた。何とかはじめの乱戦状態を數名倒していくぐり抜け、こうして逃げているというわけだ。ただ、もちろんこの男も、このまま走り続けて撒いてしまえるとは思っていない。ここは、見晴らしのいい街道だし、逃げ込めるような森などの視界を遮る物もない。下手に走り続ければ体力がきれてしまう。そこを無数の刃に襲われることになる。だから、体力がいくらか残っているうちに、戦いに適した場所を見つけてそこで敵を迎撃つつもりでいるのだ。しかし、走れども走れどもそんな場所は見つからない。

「仕方がないか。」

男は舌打ちをすると、仕方なく街道から少しそれで草原まで走るとそこで敵と向かい合つた。一斉に敵が男を取り囲み剣を向ける。しばしの間、剣と剣がぶつかり合つたが、所詮結果は知れている。人数が断然違う上、男は長旅をして疲れてきている。それでも男が何とか踏ん張れているのは、男の実力と、男が使っている剣の御陰だろう。男は、そこらでは手に入らないかなりよい剣を使っていた。男は、何とか5人ほど切り伏せることができたがそこで体力の限界が来てしまった。これまでか、と男が思ったその時、騎士達が此方側をじっと見て、呆気にとられているのに気がついた。つられて男も振り返った所、思いがけない光景が目に飛び込んだ。なんと、女性が此方に走つてくるではないか。それが、普通のか弱そうな女性なら、男はなんとしてでも彼女を守つてやるべきなのだ。しかし、その女性はそのような人ではなかつた。彼女は手に剣を持って、此方に走つてくるのだ。

「一人に多数とは卑怯な！助太刀いたします。」

そこで騎士の一人が我に返り、彼女に斬りつけた。いや、斬りつけ

ようとした。剣が、彼女の身体に迫る。誰もが、次の瞬間には彼女は骸と化すと思った瞬間、騎士の剣が宙を切った。

「なつ！」

騎士が驚いたときには、

「遅い！」

という声と共に、後ろから深く剣が突き刺さっていた。何が起こったのか分からずに絶命した騎士を尻目に彼女は次々と騎士達を相手にしていく。

「何をしているの？ 私一人に戦わせるつもり？」

彼女が男に抗議の声を上げたとき、男もようやく我に返り戦闘を開させる。騎士達も再び剣を振るい始めたが、元々互角よりも少しばかり男が不利な状況であったのだ、体制は逆転した。

「一人を相手にこれだけの人数でかかるとは、卑怯な奴らね。」

闘いが終わり、彼女がそう言つたとき、地面には10人ほどの騎士達の死体が転がっていた。残りの騎士達はこれはかなわないと思い、皆逃げていった。男も、あえて追おうとはしなかった。

「助太刀、感謝する。」

男は剣を振つて血を落としてからさやに収めながら言った。女性も剣をさやに収めながら言った。

「ところで、彼らは何者なの？ 見たところ、何処かに使っている騎士達みたいだけど、主人がいる騎士ならこんな卑怯なまねが赦されるはずは……」

「……」

男が黙り込んでしまったのを見て、女性は詮索を止めることにした。「まあ、言いたくないことを無理に言わせるのは私の好む所ではないわ。ところで、貴方はこれから何処へ向かうつもりなの？」

女性が尋ねると

「とりあえず次は進はシンクスへ向かう。そこから船でウイングストーへ向かう。」

ウイングストニアとは、現在一人がいる国、ティルギスの東側に位置する国である。ティルギスからウイングストニアへ向かうにはたいていの場合、シンクスから海路で行くのが一般的である。

「ウイングストニア、今は少しばかり政府で揉め事が起きたとかきいたことがあるわ。何でも、ザーク騎士団の騎士団長が謀反の疑いで國を追放されたとか。」

その言葉に、男は少しばかり困ったような顔をして

「ああ、そちらしいな。」

と言つた。

「ところで、御前はこれからどうするのだ？ 行く道はあるのか。すると彼女は、すましてこう答えたのである。

「できれば、私も一緒に行かせてくれるとありがたいんだけど。」

男は、すぐにその言葉の意味が飲み込めず、

「はあ？」

と間の抜けた声を出してしまつた。

「だから、一緒に連れてつて欲しいんだってば。」

「馬鹿を言つたな、詳しいことは話せないが、さつきのことでも分かつたと思うがこれから行く先は俺を狙う人物達がうようよいところなんだぞ。とても女性を連れて行くわけにわいかない。」

その時、男は女性の気配が変わつたのを感じた。

「女性だから連れて行けないってわけ？ その人がたとえ十分な実力があつても？ そして、男だったら弱くてもつれていいくというのか？ 女よりも男が強いなんて誰が決めたんだ！ おい！」「お

さすがの気迫に男も少し押された。

「わ、分かった『女性だから』連れて行けないのではない。これら先が危険なんだからそんな簡単にさつき知り合つた人を連れて行くわけにはいかないのだ。」

「じゃあ、一人でそんな危険地帯に乗り込んでいくわけ、当然、何か目的があるんでしょう。その目的を果たせないまま殺されてもいいの？」

「・・・・・」

「今知り合った人を連れて行くわけには行かないという理由で無駄死にするなんて、私はまっぴら」めんだね。」

男は、少し考えたあと、突如笑い出した。

「な、何がおかしいの！」

「いや、一見は可憐な女性が、そんなことをペラペラと喋るのがおかしかつたのさ。それよりも、そうだな。強い味方が欲しかつたのは本当だし、できればついてきて欲しい。でも、本当にいいのか？途中で殺されるかも知れないんだぞ。」

女性もまた笑いながら答えた。

「望むところね。私よりも強い人間を見つけられて、そいつに殺されるのなら本望だわ。」

どう間違えれば美しい女性の口からこんな台詞をが出てくるのだろうか。そう思いながら男は言った。

「それなら有り難い。これからも協力してもらうとしよう。」

「じゃあ、一応自己紹介をしておくわね、私はリシア＝ルーティン＝ティ尔斯、リアと呼んでくれればいいわ。」

「俺は、ギルティス＝リースン、ギルスと呼んでくれ。」

そこでリアはこの名前は何処かで聞いたことがあるような、と思つたが口にはしなかった。

「さて、出発するとしよう。早く行かないと彼らが戻つてくるかも知れない。」

しかしリアは急ぎ出発しようとするギルスを制止した。

「少し待つて、私、野宿をしていて起きてすぐにここに来たの、だから、いろいろと身支度が。」

「どのくらい時間がかかるんだ？」

「30分くらい。」

「30分！？」

男はかなり驚いた。何をすればこんなに身支度に時間がかかるのだろうか。自分はせいぜい5分程度で身支度など調べられるのに。

「何をすればそんなに時間をかけることができるんだ?」

「髪をとかしたり、服装を整えたり、身だしなみをいろいろと。」

そう言うとリアは早くも野宿していた場所へと走つていっていた。

「やれやれ、こういう所は女性らしいんだな。」

心強い味方だが、少し面倒そうな人だ。彼はそう思いながらワイン

グストニアの方を見つめた。

彼の旅は、まだまだ始まつたばかりである。

Episode 1 ~出発~ (後書き)

Hピソードーを書きました。やつと、ストーリーが進行し始めた感じがします。これからも宜しくお願いします。

Episode 2 ～王の失踪～

ウイングストニアの首都であるウイザニアの、中心的な建物であるウイザニア城では一人の男が苦悩していた。

「あー、もう嫌になってきた！」

彼の名前はエシル＝バー＝ティス、ウイザニア軍の最高権威である4人の将軍のうちの一人である。しかし、最近は特に戦争もなく平和そのものであり、彼の仕事は主に所謂デスクワークばかりである。今日も、書類の整理を彼はしているという訳だ。

「大体、将軍になつたつて一つもいいことなんかないし、名前だけつてやつだな。」

そんなことを言いながらふと彼は窓へと目を向ける。

「・・・・・ギルス。」

彼はかつては親友であつた男の名を呼ぶ。幼い頃から二人は親友であつた。しかし、彼は突如悪となつた。この場合の悪とは、エシルからギルスを見ての悪である。

「・・・・・気晴らしに出かけるか。」

そう言うと彼は部屋の照明を少し回した。すると、その隣の壁の一部が横に動いて、隠し通路への入り口が現れたのだ。

「さて、夜の街へ出かけようじゃないか。」

ウイザニア城が建設されたときはウイングストニアはティルギスとの戦争の真っ最中であつた。だから、もしも仮に城が襲われたときに重役達が逃げられるよう城のあちこちに隠し通路を使つたのだ。そして、戦争が終わり、城を当てた人物達や隠し通路のことを知っている人物達もいなくなり、今では隠し通路の存在を知つている者は一部の人間でしかない。エシルもその一人である。彼は去年まで執事であつた者が城を出て行くときに隠し通路の存在を教えてもらつたのだ。

ウイザニアの町で有名なウイリュース剣技場。ここでは、剣の腕に自信のある者達が集まり、手合わせをしたり、剣の技術を教えたり、情報交換をする所だ。そこへ、新しい来訪者が訪れた。

「よう、ヒューリス。今日は来ると思つてたぜ。」

ヒューリスと呼ばれた来訪者は笑みを浮かべながら男の隣に座った。

「ああ、たまには息抜きをしないとな。」

ヒューリスとは、エシルが街に来るときに使つてゐる偽名である。エシルはここでよく剣の腕を磨くのだ。

「ところで、ヒューリス。新しい情報を入手したぜ。」

「何だ？ 聞こうじゃないか。」

「実はな、今は城に王が居ないんじゃないかという話が持ち上がりてるんだ。」

彼は、驚きのあまり持つていたグラスを落としそうになつた。

「そんな、馬鹿な！」

本当にそんなはずはないのである。もし本当に王が居ないのなら將軍である自分が知らないはずがない。しかし、この男の情報はいつも確かに外れたことなどないのだ。彼が將軍であるなどとは夢にも思わない男はさらに続ける。

「そう思うだろ、でもな、城に使えている者の話では最近王は部屋に閉じこもつてばかりで全く部屋からでない。そして、一度用があつてドアを通して話をしたらしいんだが、その時の王はいつも少し違ひ、何か違和感があつたそうだ。これらのことからだな、今城にいる王は実は替え玉何じやないかと思う。」

「なつ！」

「何か事情があつて入れ替わったのか。よからぬ事をたくらんだ奴が王を殺すか何処かに閉じこめるかして、自分が王に成り上がつたのかも知れない。」

エシルは、二の句が継げなかつた。もし、王が何者かの陰謀で入れ替わつたのではなく、自らの意志で入れ替わつたのだとしたら、王

が何処へ行つたのかはエシルには想像がつく。

「ティルギスへ行つたのか！？」

「え？」

ヒューリスに不審な目で見られたので、エシルは慌てて
「いや、何でもない。ちょっと急用を思い出したから今田はもう帰
る。」

と言つて外へ出た。

冷たい風が彼の身体をさましていく。もう秋の終わり頃である。

「陛下の御出身はティルギスだからな。恐らく、ティルギスに助け
を求めるに言つたのだろう。」

城の中で、最近不穏な動きがあることは彼もうすうす気づいていた。
貴族や騎士団達が大臣を味方につけて王宮乗っ取りをたくらんでい
るのだ。そこで、王は城を逃げ出すも同然の形で姿をくらましたの
だ。ただし、自分が蒸発してしまえば、城を反逆者達に開け放して
しまうも同然になつてしまふ。そこで、替え玉を用意していつたの
だ。

「確かに、ギルスもティルギスへ行つたんだつたな。」

陛下は、もしかしたらギルスに会いにいたのかも知れない。ふと、
そんな考えが彼の頭に浮かんだ。陛下はギルスのことをかなり頼り
にしていたのだ。

「やっぱり、陛下は俺では頼りにならないとお思いなのか？」

彼も、謀反が起つたときには陛下を守るために全力で戦う覚悟で
いた。しかし、陛下は自分ではなくギルスを頼りにした。悔しかつ
た。そして、悲しかつた。何故自分はいつもギルスに負けてばかり
いるんだろう？

「いや、違う！俺は勝つたんだ！奴を城から追い出したじゃないか
！」

じゃあ、どうしてだ？何故こんなに涙が止まらないんだ？本来なら、
笑うべきだろ？長年のライバルを、宿敵を追い払つたのだから。

彼は、どうしても、涙が止まらない理由が分からなかつた。

Episode 2 ～王の失踪～（後書き）

二話まで読んでいただき、ありがとうございました。もし宜しければ、今後の執筆の参考にしたいので読んでくれた感想をコメントとして送つていただければ幸いです。

Episode 3 ～再会～

大勢の人でにぎわう大都市、シンクス。今日は休日なのだが、やはり、人の動きは耐えることがない。そんな人混みの中に混じつて若い男女が歩いていた。一見、休日に一人で出かけている恋人に見えなくもないのだが、一人とも腰に剣を持つている所を見ると、そんな者ではないらしい。

「ところで、すぐに港へ行くの？」

女の質問に男が答えて

「いや、少し休んでから言つてもいいだらう。」

と言い、酒場に向かつて歩き出した。

酒場は昼間なので少しすいていたが、それでも、人は多い方だった。二人はカウンターに座った。

「ウイルム酒を。」

「わたしもそれで。」

すると、男は慌てて窘めた。

「おいおい、かなりきついぞ。」

しかし、酒場のマスターは平氣で2杯のウイルム酒を持ってきたので男は呆れてしまった。さらに女はそのウイルム酒を一気に飲み干してしまったのだ。

「おいしい。」

開いた口がふさがらないとは、こういう事を言つんだろう。男は、すぐにその光景を認めることができなかつた。ウイルム酒とは、大の男でさえ2杯も飲めば倒れてしまうほどきつい酒なのだ。それを一気に飲み干して平然としていられるとは・・・。

「なあ、リア。」

「なに？」

男は言葉を選ぶよつにして声を出した。

「御前の身体は一体どうなつていいんだ?」

リアと呼ばれた女は、楽しそうに答えた

「別に、普通の身体じゃないかしら? ギルス。ギルスという名の男もこの地点で既に杯を半分ほどあけているのが、この飲み方でも十分早い。

「御前には驚かされっぱなしだな。」

「型にはまらない」というのが私の生き方なの。

ギルスはさらに呆れたが、いつまでも彼女の話を聞いていても仕方がないと思ったのか、今度はマスターに話しかけた。

「なあマスター、何かウイングストニアのことで変わったこととかを聞かないか?」

「そうですねえ、あ、そろそろ、そういうえば、イリス将軍が、将軍からおろされたらしいですよ。」

「なんだって! ?」

ギルスはよほど驚いたのか、机を強く拳で叩きながら言った。

「じゃあ、将軍が三人になつちまつじゃないか。」

「いえいえ、代わりにルシアス殿が将軍に昇格なさつたとか。まあ、

ギルティス将軍も城を追放されて、代わりに、無理矢理ともいえるやり方でエシル殿が将軍に昇格なさつたばかりだというのにねえ。」

ここでリアは驚きのあまり声を出しけたがギルスが視線を送ってきたので黙つてることにした。

「あのときもただの近接騎士団の指揮者だった者がいきなり将軍になんて、ということでかなりごたごたがあつたというのに。これではまた国民の不満の声は高まりそうですね。」

酒場を出たあと二人は黙つて港へと歩いていた。

リアの方はギルスが実は元将軍であることについて聞きたいのだが、ギルスが先ほどから黙つてしているので聞くに聞けない状態なのだ。

ギルスの方はさつきマスターから聞いたことについて考え方を整理している真っ最中なのだ。

二人は無言のまましばらく歩いたが、ふとリアがギルスの方を見る
と、ギルスの姿が見えない事に気づいた。慌てて振り返つてみると、
自分から5メートルほど後ろに彼の姿があつた。リアはギルスとは
反対側の方を見ながら歩いていたので、彼がいきなり立ち止まつた
ことに気がつかなかつたのだ。彼は、リアの斜め後ろあたりを、驚
愕の表情で見つめていた。不思議に思い、彼女もそちらの方向を見
てみた。

そこには、一人の男が立っていた。年は30代前半といった所だろうか。しかし、その整った顔立ちと、とてもたくましい体と、腰に付けた長剣が彼を若く見せた。

ギリス 徒かどもがしたの？」

卷之二

三十九

「」の世界

Episode 3 ～再会～（後書き）

しばらく放置していくすみませんでした。これからも宜しくお願いします。

Episode 4 ～ウイングストニア国王暗殺計画～

「それで、どうして一国の将軍と王ともあらつ人がこんな所にいるの？」

リアがいい加減きかずに入られないといった感じで尋ねた。

「まあ、おまえもさつきの酒場の人の話で俺がここにいる理由はだいたいわかつたと思うが」

「ええ、それは大体わかつたわ。」

そこで、リアは困惑に満ちた表情になつて、

「でも、こちらの国王陛下までがいらっしゃるのはどうこうしたことなかしから。」

と早く事態を理解させてほしいといつたふうに言った。

「それは俺にもわからない。俺も陛下は城中にいらっしゃるものだとばかり思つていた。」

「それでは、私がここにいる理由を説明してもよろしいかな？」

それまで黙つていた国王が、口を開いたのでぎるすとリアはあわてて口を噤んだ。

「最近、城の情勢が不穏なのはギルティス、御前も知つているだろう。」

「はい。將軍の急な解任とエシルとルシアス中尉が昇格したと聞いたときから何かを感じてはいましたが、まさか王が城を出でくるほど凄いことになつてゐるとは思いもよらず・・・。」

「実は、私の命は狙われているようなのだ。」

二人とも、事の深刻さに思わず息をのんだ。

国王の暗殺を企むということは、そこらの貴族を暗殺するのとは訳が違う。失敗すれば死刑は当然、しかも成功する確率はよほど腕に自信がない限り、0に限りなく近い。にもかかわらず暗殺を企むといふことは、そのリスクよりも暗殺によつて得られるものが多いと云ふことなのだ。そのくらいのことは城のことについてはあまり関

わりがないリアでも知っている。

「確かにいうわけではないが、そうである可能性は高い。まあもちろん、最近の物騒な事のせいで私が敏感になりすぎて被害妄想を抱いているだけなのかもしれないが。」

「陛下は何処からその情報を？」

「そのことの密告の手紙が私の部屋に置かれていた。私が部屋にいない間におかれたのだ。」

「その手紙を信じたのですか！？」

「たったそれだけで危険を冒してまで城を出てこななくてもと言いたげな様子でリアが言った。

「いやリア、当然のことながら陛下の部屋は厳重な警備がしかれている。そこに手紙を置くというのは容易なことではない。かなりのリスクを覚悟で忍び込んで置いたのだろう。そんなことをいたずらなんかでするはずがない。」

とギルスが言うと、国王が

「しかし、私を脅かして何かにはめると言つ」とは考えられるがな。まあ、私もギルティスと同じような考え方で城を抜け出してきた。」「しかしどうやって？そして、陛下がいなければ今城はどうしているのです？」

「もちろん、私がいなければ城は機能しなくなってしまうし、謀反を企む奴らの思うつぼになってしまふ。そこでだ、私は今ちゃんと城にいる、ということにしてある。」

「いや、居ないじゃないですか。」

「もちろん口上だけそうしてあるだけだ。つまりは俺の部屋には信頼できる部下、名前は伏せるが、とにかくそいつが居て、俺の代わりになつてもらつて居る。」

「でも、いろいろな人たちが用事があつてくるのではないか？」「私は今は少し気分が優れない。重要な用事だけドア越しに話すようにしている。」

「いや声が全然違つでしょう。」

「少し鼻声だといふことにしてある。」

「…………。」

「ウイニングストニアが少し心配になってきたな。」

「兎に角、私がなぜ御前のところにきたのかといふと、御前が一番信頼できるやつだからだと思つたからだ。」

「え、俺ですか？」

「そうだ。」

「いや、しかし俺はあまり賢いというわけでもないし、実際俺の知らないうちに将軍から俺を下ろす計画が着々と進んでしまつていたみたいだし、それに全く気づかなかつたし、自慢できる」といえば剣の腕くらいだが。」

ギルティスはウイニングストニアでは唯一エシルと互角に戦える騎士として知られているが、勝負は時の運とも言い、必ずしも一人がウイニングストニア一強いというわけではない事を記しておく。

「だからこそ私は御前を信頼するのだ。頭があまりよくないやつは謀反を企むなんて事も考えつかないからな。忠実さにおいては一番だ。」

「褒め言葉として受け取つておきます。兎に角、これからどうするのですか？」

「私もいつまでも城を替え玉で通すのは無理がある。そろそろ城に戻らなければならぬ。しかし、まさか御前はウイザニアには入れまい。顔を知られすぎているしな。」

「それなら、リアを城内に置かれてはいかがでしよう?」

「気になつていたんだが、そちらの女性は?」

「彼女はリシア＝ルー＝ティン＝テイルス、旅の途中で助けてもらつた、命の恩人であり、戦友です。」

しかし国王はまさかこんな女性が武術でギルスを助けたとは思わない。きっと誇張で言つてゐるのか、敵から逃げているときには匿つてもうつたのだろう程度に彼は考えた。そして、城に置くという意味も、自身に何があったら、急いでギルスに伝えに行くという役目だ

るつと思つた。まあしかし、ギルスがそしもで言つぽぢの女性だ、信頼はできるだらうとも思つた。

「分かつた。彼女に『護つて』もらひとしよう。」

国王は半分軽い気持ちでそう云つた。彼女が最高の護身兵になることを彼はそれほど遠くないしつけで知ることになるのだが。

Episode 4 ～ウイングストニア魔王暗殺計画～（後書き）

久しぶりの投稿となつてしましました。長い間放置してしまい、本当に申し訳ありませんでした。

「暇だ。城の生活つてこんなにも暇だったの。こんな所にすんでる人の気が知れないわね。」

ウイングストニア城にリアがきてから一週間がたった。まあ、彼女が暇だというのも無理はない。何しろ国王は彼女がこの城にきたとき、彼女を国王専属の小間使いとしてしまったのだ。もちろん、城内は上を下への大騒ぎになつた。当然のことながら、国王には既に身の回りの世話をするものは何人でもいる。それを今更になって、専属の者を欲しがるとは、普通の人は考えない。そんなのは口実で、実は想いをはせていいのではないかと考へるのだ。しかし、相手は出身もしれぬ庶民である。もちろん、妻になど当然できないし、愛妻にすることすらかなりの反対を受けるだろう。だから、小間使いとして側に置いたのだ、と考へればすべてつじつまが合うからだ。だから、国王の愛人？かもしれない人にそんなに仕事が回つてくることはないし、だいたいそもそも国王の身の回りの世話をする者はすでにいるのだから、リアがきたところで彼女がすることなど何もないのだ。そして、特に国王が暗殺されるような様子はない。だから、彼女はものすごく暇なのだ。数少ない仕事といえば、興味本位で自分と国王との関係を聞いてくる小間使いに納得のいくような適当な返事を聞かせてやることと、国王が暗殺されないか見張つていふことぐらいである。

「まあそういうな。私だつて好きでこんなところに住んでいる訳じゃない。」

そう国王が聞くと、リアは少し驚いた様子で、

「え、国王という身分は好きじゃないの？」

と聞いた。当然である。国王という身分は誰もが喉から手が出るほどほしいと思うのが普通だと思っているからだ。

「ああ、前王が亡くなつたとき、不幸なことに跡継ぎが誰もいなく

てな、国王不在の状態が長いこと続くと国の存続が危うい。ということでおかげで当時絶大な国民の支持を得ていた私が飽くまで（とりあえず）国王になつた訳なんだ。

「でもそれって変じやない？普通跡継ぎのいない国王なんているの？」

「まあ普通はいない。だが前王の場合は就任してたつた一年で急病で休止してしまつたのだ。心臓の病だつたらしい。まさか就任して一年で亡くなられてしまうとは誰も考えなかつたからね。当然陛下本人も跡継ぎのことなんて全く考えてなかつたのだろうよ。」

「でも、ギリアは飽くまで仮の王様なんでしょ。どうしてまだ玉座に收まつていいの？」

リアは国王のことを呼び捨てでギリアと呼ぶ。もちろん、国王に向かつて敬語も使わずにこんなになれなれしく話すのは普通なら許されないことだが、リアは『私は本来ワインディングストニアの国民じゃないからワインディングストニア国王に敬意を表す必要もない。』というほどんど無理矢理な理論を生み出してしまつたのだ。因みに、彼女の出生地はワインディングストニアの北に位置する国サウスライトの辺境の村、スノフリーブスらしい。そして、ギリアもそれを許容しているのだから、彼もかなりの心の広さである。『国王になつてからといふの、皆に敬われまくるのが少し嫌になつてきてな、ちょうどよかつた。』と言つていた。悪く言うと変人である。しかし、この無粋さも彼が国民の支持を集めた理由の一つである。因みに、彼の名はギリアリス＝ワインディングストニアである。ワインディングストニアでは、国王一族は代々ワインディングストニアの名字を持っていたので、彼は国王就任時に就任中だけと言つことで名字を変えたのだ。しかし、彼女がギリアと親しくすればするほど、ギリアとリアは恋愛関係説が確信を得ていつてしまふのだが。

「うん、それはだな、私はすぐにもつと適任者が現れるだろうと持つていたのだが。」

「当てが外れてしまつたわけだ。」

「ああ、当てが外れ続けて早3年だ。」

ところ変わつてここはウイングストニア城下町の一般人にはあまり知られないが彼らの生活に必要不可欠な場所。もしここがないと生活排水が溢れてしまい衛生に非常に悪影響が出る場所である。つまりは地下下水道である。ここに一週間前からある人が（いやいやながらも主君のために）暮らしている。

「くつかー、もう、ここ、嫌。」

ギルスである。彼は町中に出るわけにはいかないので、ここで暮らしているのだ。国王は、『そんなところで暮らさなくとも町の近くのシユリーブス村あたりでいて、異変があればすぐ来てもらえらればいい。』と言つたのだが、忠誠心が非常に強い彼は、『いえ、そんなところにいたのでは、陛下の元へいくのに数時間はかかってしまいます。陛下のためなら少々の生活の不便くらい、何とも思いません。』と言つたまではよかつたのだが、彼自身、ここまで地下下水道が酷いところだとは思つていなかつたのだ。で、この今まである。

「はあ、こんなことなら陛下の言つたとおり、シユリーブスに居ればよかつたかなあ。」

後悔先に立たず、である。そこで彼はふと、自分の剣に目をやる。そしてその柄に刻まれた文字を見て、溜息をつく。

「エシル・・・・・。」

その文字は、彼が将軍に就任したときに、エシルと二人で互いの剣に友情を誓い合つてそれぞれの剣に文字を刻んだのだ。

「必ず、決着をつけん！」

”この剣に賭けて、この刻み込んだ文字よりも深く俺たちの友情は刻み込まれ、続していくだろう。”

Episodes ～友情の誓い～（後書き）

Metallic Featherersを読んでいただきありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

Episode 6 ～味方～

何処の世界にも、人の物を盗む職業は存在する。まあ、すなわち盜賊である。此処、地下下水道にもそのような人が現在約2名。

「ねえ、本当に此処で会ってるの？」

「・・・・・多分。」

「多分！？ちょっと、あなたの情報を信じてこんな臭いとこ今まで遙々『はるばる』と来たのよ！」

かなり揉めているようである。

「ちょっと聞いてるの？ オーシャ！」

オーシャと呼ばれた青年がそれはかなりめんどくさそうに答える。

「いや、でもこの情報はあまり確実性がある物ではないって言ったけどエリシアが『行つてみなきや本当かどうかなんて分からぬじやない！…』的なことを言つて俺を無理矢理連れ出したよくな・・・。」

エリシアと呼ばれた女性はめんどくさそうなオーシャとは対照的にあっさりと答えた。

「あなたの思い違いでしょ！」

事のあらましを簡潔にまとめてみよう。オーシャがあまり確実ではないが

「地下下水道から城下町のお屋敷であるリー・ラ屋敷に忍び込める」という情報を掴む。それをエリシアに伝える。行きましょう！- 真実とはまとめてみると實に簡単な物である。真実は簡単すぎてかえつてなかなか分からぬといつ過去の偉人の言葉があつたような、無かつたような。

そして現在の状況を言つと、その屋敷に繋がつてゐるはず、のマンホールを開けようとしてオーシャが悪戦苦闘しているわけだ。

「ロックは掛かっていないみたいなんだけどなあ。上に何か載せて
いるのかも。」

「つかマジで早く開けてくれない。この臭いがもう何というか、腐つた卵と温泉の臭いが混じつたみたいな臭いじゃない。」
温泉のあの独特の臭いは大体硫黄の臭いでそれを孵卵臭ふらんじゅうと表現する。だから二つの臭いを混ぜても結局孵卵臭だと言つことを彼女は知つてゐるのだろうか？

「ん。おー持ち上がる。」

國二二は國二二

開いたには開いたのだが、彼は恐らくマンホールの蓋にしてはえらく軽いことに気づいたはずだ。それもそのはず、彼一人で持ち上げたのではなく、上にいる人たちも同時に蓋を持ち上げたのだ。上にいる人はすなわち、

一動くな！もう逃げ場はないぞ！」

「あれ、何でばれたんだろ? まあ、兎に角、『逃げた方がいいです
よ』的な空氣がめっちゃ漂ってるようだね。」

ヤはリ二ノ意度は文照由である

卷之三

待つて言われて待つ馬鹿かしるせんですか、うう、うひつて記入に対する心理的な効果には

ああ、あれで犯人は対する心理的な効果と人混みは逃げ込まつたときに大声で『待て！』って言うと周りの人がみんな立ち止まって犯人だけ逃げるから見失うことがないと上手くいけば周りの人には身柄の拘束の協力を得られるかもしれないから言づらしいよ。』

バシャバシャと、下水が撥ねる音と警備員の声が静かな下水道を満たしていく。二人とも此処で捕まつては大変と必死で逃げるが、警備員も必死だつた。何を隠そうこの警備員達ここ最近はスランプ続

きで次に仕事を失敗すればクビ！といわれているのだった。しかも
よりによってその次の仕事が盜賊の逮捕なのだから失敗すればもう
100%クビである。

「はあ、はあ、はあ。しつこいな彼奴ら。」

「オーシャー前！」

「つーうそおおおおおおおおお！」

彼が叫ぶのも無理はない。なんと前は行き止まり、ではなく、
・・・、剣を構えた男つまりはギルス、がいた。

「挟み撃ちよ！どうしよう、このままじゃ。」

「こりなつたら、戦うしか！」

ところが、二人がそれぞれ武器を手に持とどとしたとき、その男が
二人の前に出た。要するに一人と警備員達の間に入った。

「御前ら！一人に対して五人がかりとは臆病極まりないな！その腐
った性根を叩き直してやる！…」

「「え？」」

この台詞は一人と五人が発した物である。一人にしてみれば、前か
らも攻めてきていたと思っていた敵が急に自分たちを守ってくれた
のだ。で、警備員達にしてみれば、一般人が盜賊の逮捕に協力して
くれる、と思いつか、いきなり自分たちに剣を向けたのだ。

「いや、そいつらは盗、」

必死で誤解を解こうとする警備員達だが、

「問答無用！」

瞬時に五人とも戦闘不能に至らしめた。

「ふう。大丈夫だつたか？御前ら。」

こういうのを

「偽善」ということができるのだろうか？まあ、無知は罪なのであ
る。

「えつと、あの・・・。」

「人がどう言おうか迷つてゐるうちに新手が来た。」

「待てー！」

「彼奴も盗賊の仲間みたいだぞ。警備員達を倒しやがった！」

「…………」「」

三人とも一瞬の沈黙。最初に口を開いたのは、ギルスだった。

「え、御前ら、盗賊？」

「はい。」「

あつさりと肯定する。

「待て待て――！！」

今度の追っ手は明らかに三十人はいる。

別にまだ何も被害はないのだから、そこまで頑張って追いかけなくても、と思うだろうが、実はウイングストニアでは、犯罪者を捕まえた者には国から賞金が出るのである。まあこの場合は警備員達の雇い主であるリーラ屋敷の主人がもらえるのだが。警備員達は単にクビにされたくないだけである。盗賊をとらえて主人が賞金をもらえば、しばらく自分たちのクビは安泰だろう。そういう魂胆である。

「まあ、とりあえず、逃げませんか。」

オーシャが、至極尤もな提案をする。

「そうだな。」

ギルスも大賛成だ。勿論、エリシアも。三人とも意見が一致したところでおいかげっこ再開である。

「待て――！」

「待つもんですか！」「

（数十分後）

「ふう、何とかまいたみたいだな。」

「ええ。」

「ところでおっさん。」

ギルスは、おっさんというのが自分のことだと理解するのに数秒を要した。それから、言った。

「俺はまだおっさんといわれるような年ではない。」

「じゃあ、じいさん。」

「斬るぞ。」

どうやら加齢に対してコンプレックスを抱いているようだ。

「悪い悪い、冗談だつて。ところであんた、名前は？」

彼は、本名を教えようかどうか悩んだ末。止めた。今の自分の名前はウイニングストニアの人には伝えない方がいいだろう。

「イース。」

彼が昔、こゝそり町に出て一般人のふりをして遊ぶときに使っていた名前だった。

「俺は、オーシャ。そしてこゝちがエリシアだ。まあ、大体俺達のことは分かったと思うが、まあ、盗賊、的なことをしている。」

「で、良く言うと俺は御前らを助けた。悪く言うと犯罪者に加担しちまつたというわけか。」

つくづく可哀想な男である。

「まあそう嘆くなつて。俺らにひとつては命の恩人だからな何でも聞いてやるぜ。なんか盗んできてほしい物があつたりしたら、」「生憎無い。」

「そうか。物だけでなく、情報とかも手に入れられるけど。」「情報！？」

そこで男は反応した。

「ああ、盗賊業には情報の入手が必須だ。専門の情報屋に頼む奴もいるが、俺は自分で情報の入手もしているからな。大体の入手ルートは網羅してるぜ。」

「・・・・・、国王の暗殺、に関しての情報が欲しい。」

Episode 6 ～味方～（後書き）

かなり久々の投稿となってしまいました。これからも宜しくお願いします。

Episode 7 ~計画~

「国王陛下の暗殺、ねえ。」

「ああ、実は、」

「いや、そつちの事情なんてのは話す必要はない。」

相手の事情を細かく聞いてはいけない。情報屋の基本である。

「何とか調べてくれ。頼む。」

しかし、オーシャは以外にもあっさりと答えた。

「いや、わざわざ調べる必要はねえ。」

「ど、言うと?」

彼は、真剣そうな表情で口を開いた。

「エリシア、例の事だがイースになら話しても良いだろ?~

「ええ、私は異論はないわ。」

「IJの城下町の外れに、『ホライズン水平線』といつ秘密組織、まあやつてることとは暗殺業だけじゃなくヤバげな依頼は何でもこなす、そのかわり依頼料は俺らから見たらゼロをいくつか間違えて多くつけていませんか的な額なんだが、まあそういう組織があるんだ。で、まあ、そこに国王暗殺の依頼が舞い込んだ、らしい。」

「らしい?」

最後の語尾が気になつたのかイースもといギルスが尋ねる。

「いかんせん、この情報は本当に門外不出の極秘なのよ。本当は私たちも他言無用にしていたかつたんだけどね、まあ、貴方は恩人だし。」

「うーん。」

「どうか、で、その依頼主は?」

「それが、俺も知っているあらゆるツテを使って調べてはみたんだが……。」

「分からぬ、ってか。」

「ああ、悪いな。」

「いや、いいや。それだけでも十分有り難い。」

さて、とギルスが腰を上げた。

「そろそろ俺は行く。この事を伝えなければ、」

「まあ、待てよ。」

突如、オーシャが呼び止めた。

「ん、何だ？」

「俺の知り合いで、組織と繋がっている人がいる。そいつに頼めば、もう少しマシな情報が手に入るかもしれない。分かつたら連絡したいから、連絡先を教えてくれ。」

イースはしばしの沈黙の後、こう答えた。

「此処だ。」

「は？」

意味が分からなかつた。無理もない、連絡先を聞いてそんな返答をされて理解できる人がこの世に何人居ようか。

「だから！此処、地下下水道が連絡先だ。訳あつて此処に住んでるんだよ。」

「・・・・・」

「・・・・・いや、気まずいから何か喋つてくれないか？」

「どうやら、かなりスペシャルに分けありのようね」

「ああ、まさかの此処が家ですか。」

まあ、無理もない。彼らも先ほどから、十分この地下下水道の臭いと吐き気を催すような光景と居住環境の悪さを体験し、さつさと此処をでたいと思っていたのである。そこでまさかの毎日暮らす輩が居ようとは、世の中は広いものである。

「俺だつてな！好きでこんな所に暮らしているわけじやないんだよ！」

「だから、訳有りなんでしょう？」

「ああ、まあその訳は話すことはできないんだが。」

「いいさ、命の恩人にあれこれごちやごちや聞きはしねえ。」

「有り難い。それと、もう一つ聞きたいことがあるんだが。」

「

「何だ？」

「町の誰にも姿を見られる」となく国王と直で連絡を取る方法はないか？」

無茶苦茶な相談である。国王とは、漢字の通り、一国の「王」なのである。普通にやつても、城の物をとりしてさえ、すぐに連絡を一般市民（彼は今は一応ただ的一般市民である。）がとることなど至難の業。ましてや直でなど不可能だ。だが、オーシュは不適に笑い答える。

「あんた、俺を誰だと思ってるんだ？俺はウイングストニアで五本の指に入る盗賊だぜ。国王に直で連絡を取るくらい余裕余裕。」

「（自称）五本の指に入る、ね。」

「…………う、うるさい。で、具体的にどうしてほしいんだ？」

「…………手紙を、届けて欲しい。」

「ん、何だ、それだけでいいのか？」

「いや、それだけって、手紙を臣下の者に見られたりしてはいけないのだぞ。飽くまで、『直で』陛下に届けるのだ。」

「いやいや、分かってるさ。お望みならば、直で謁見室まで連れていつてやってもよかつたんだけど。」

「マジか？」

「オーシュ、できることを言つのはやめなさい。イースが手紙を届けてくれつて言つ前は無茶な注文が来たらどうしようつて、法えてたくせに。」

やはり彼にもそこまではできないようつであることがエリシアによつて暴露された。

Episode 7 ~計画~（後書き）

余談ですが地下下水道って居住することは可能なんでしょうかねえ?
?

Episode 8 ～テイルギス宣戦布告～

一国の国王ともなると、常に誰か臣下の者がそばにいるものである。一人だけになるときなどほとんど無い。というか、無い。だがまあ、完全にないというわけでもない。が、しかしもちろんそんなときでも声を出せば聞こえる程度の距離にもちろん誰か人はいる。だから、こつそりと近づこうというのは基本不可能なのだ。基本的には。

「おはよう!」やこます!...陛下。」

「ああ、おはよう。」

何気ない城の少年兵士と廊下でのすれ違い。だつたはずなのだが、ギリアがいつの間にかポケットに入っていた手紙に気づいたのは、私室に入ってからだった。「基本」が通じない人間もいるのである。

「ギルスが手紙をよこしてきた。」

「・・・・・、どうやって!?」

リアを呼び出して、召使い達を追い出して（召使い達が部屋から出る際、かなり小声で話をしていた。）ギリアが話し始めた内容に、リアが驚くのもお分かりだろう。

「・・・・・、なんか、気づいたらポケットに入つてた。」

「はあ!? それ本物?」

「・・・・・多分。筆跡はギルスの物だし、内容もあながち嘘とも思えん。」

「まあ、いいわ。それで、なんて言つてきたの?」

「暗殺の噂は本当だつたらしい。」

「・・・・・そう。」

「『水平線』^{ホライズン}という秘密組織がそういう計画をしてい、そういう情報が入つたらしい。」

「彼が調べたの?」

「いや、何でもかなり心強い味方ができた、とか。今度会うことが

あつたら詳しく紹介したいらしい。」

「それは頼もしいわね。彼一人ではいくらか不安だつたし。」
「酷い言われようである。

「でも、そうなるといよいよ不思議ね。」

「ああ。そういうた気配がなさ過ぎる。」

暗殺を企てるとなると、事前にいろいろと下調べが必要な物である。目標が一国の王ともなるとそれはかなり綿密な物になる。勿論ばれないように上手くした調べは行う物なのだが、やはり多少はそいつた動きを感じ取られてしまう。少なくとも一人はそれを感じ取る自信がある。が、それを全く感じない。

「調べをする物がかなり上手なのか。」

「その情報がガセなのか。」

「もしくは・・・。」

そこで一人が同じ考えに至つたのと、臣下の一人がノックもせずに部屋に駆け込んできたのとは同時だつた。

「イース！大変よ！！」

「エリシア！？」

イースの元へ駆け込んできたエリシアの様子は、かなり深刻な物だつた。

「水平線ホライズンの作戦が分かつたの！彼奴らは、暗殺をするために戦争を起こすつもりなのよ！！」

「はあ！？」

「詳しい話は後よ！今、ティルギスの軍勢がこっちに向かってる。明後日にもウイングストニアの国境に到着するわ。」

「何だつて！？」

「ティルギスのレリシス王はやる気満々で攻めてきている。ウイングストニアの戦力を考えて、五分五分かなとオーシュが言つてた。」

「城に行かなければ！何か方法はないのか？」

「そういうだろうと思つて、今オーシュが貴方を城に忍び込ませる

方法を探つてゐる。分かり次第、ここに来るはず……。」「そうか、ありがとう。」

一国の王の暗殺はもちろんそつそつ簡単ではない。周辺には厳重な警備がしかれてゐるし、しかもギリア王自身もなかなか強い。だが、周辺の警備だけでも弱まれば、いくら生う自身が強くても事情は違つてくる。背後を狙うもいいし、大勢で掛かつてもいい。そして、戦争が起これば、その条件を上手に具合に満たしてくれるというのだからありがたい。

「や、久しぶり。」

落ち着いたオーシュの挨拶を聞けたのは、それから数分後だった。

「ティルギスの軍勢は3万！ 我が軍はすぐに国境に集められるのはせいぜい1万！ 周辺の領主の軍勢にも連絡をとりましたが、軍勢の到着は早くてもあと3日は掛かるでしょう。」

「・・・・・、国境付近の領主の軍勢総出で国境を守りせろ。絶対にティルギス軍をウイングストニア国内に入れるな！…」

「はっ！」

大体の指揮が終わり、一段落ついたところで彼はリアに話しかけた。

「どう思う？」

「いくら何でも急すぎるわ。ティルギスのレリシスはあまり賢くはないといふ噂を聞くけど、馬鹿じゃない。」

「ああ、宣戦布告の理由も国境付近のウイングストニアの領主の狼藉が過ぎるとか言つほとんどこじつけみたいな物だしな。」

「と、なると予想が当たつてしまつたみたいね。」

「ああ、的中だ。どうも俺は悪い予感ばかり当たるという変な特性があるらしい。」

「奇遇ね。私もよ。ところで、勿論貴方も行くんでしょ。」

「ああ、本軍をつれて今すぐにでも行きたいところなのだが……。」

「ギルスね。」

「ああ、行く前にあいつと連絡を取りたい。何とかならない物か・。
・。」

もう夜も近い時分だった。

Episode 8 ～テイルギス宣戦布告～（後書き）

すいません。間を開けてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6829a/>

メタリックフェザーズ

2010年10月9日05時44分発行